

龍谷大学世界仏教文化研究センター
2016年度臨床宗教師特別講義

講演名	仏教におけるケアの可能性をめぐって
開催日時	2016年12月5日(月) 10:45-12:15
場所	龍谷大学 大宮学舎 清風館 B101 教室
講演者	大澤絢子先生 (龍谷大学世界仏教文化研究センター応用研究部門リサーチ・アシスタント)
司会	銅島直樹先生(龍谷大学 文学部教授)
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 応用研究部門
共催	龍谷大学実践真宗学研究科
参加人数	35人

【講義のポイント】

仏教におけるケアの可能性は、十分ある。仏教の営みには本来救いや他者への慈悲的要素多く含まれている。一方で、その実践にあたっては、これから来る社会の様々な変化に対応すべく幅広い分野へ目配せが必要である。また、あくまでも目の前の人の状況に応じ、自分の言葉、特に宗教者として活動する場合には自分の拠りどころとする言葉で考え、さらには新しい試みがすべてではなく、これまでのお寺にも大事な役割があることを認識し、仏教者として実践していくことが重要であるとの提言がなされた。

【講義の概要】

■はじめに——変化する家族・死

現代における看取りのイメージとして、高齢になって亡くなったおじいさん、おばあさんと、それを囲む息子夫婦、孫といったものがある。だがこれからの社会においては、そのように家族に囲まれて亡くなることは難しい。超高齢化と晩婚・非婚化に少子化が加わり、家族の状況は変化している。さらに死の臨床も変化し、超高齢社会におけるゆっくりとした死、予期できる死が増えていくなか、医療や介護などの専門職の関与が増加し、仏教におけるケアは、そうした状況のなかで実践していかなければならない。

特に家と強く結びついた日本仏教にとって、家族関係・家の変化は無視できない。家族が変化することは門徒やその構成を変化させ、門徒と寺の関係を変化させることに繋がる。またこの問題は門徒の家のみならず、寺や寺族の関係も変化させるかもしれない。その他にも、医療の発達や経済・政治情勢、価値観の変化など、これから来る社会の様々な変化のなかで「仏教におけるケア」は考えなくてはならないとの提言がなされた。

■仏教におけるケアのかたち——仏教と救済

careという言葉には、注意や用心深さ、努力、関心事といった意味の他に、世話や介護、心配や気がかりといった意味がある。ケアと同じようなニュアンスで用いられる「癒し」という言葉は、中村元『佛教語大辞典』や『岩波仏教語辞典』には全く出てこない。一方、「救済」という言葉は、「くさい」と読まれ、『岩波仏教辞典』では、仏・法・僧に帰依することによってすべての苦から救われることを指している。

近代日本において、この「救済」（きゅうさい）という言葉が学問的に扱った嚆矢が辻善之助による研究だが、この段階では、「慈善」と「慈恵」が区別されることなく、「弱者への同情」が強調されていた。また戦後には、中世民衆における救済に注目がなされ、社会的弱者への救済としての慈善活動に目が向けられた。このように、ケア的な言葉と実践は、癒しや慈善、救済など様々であり、その内実をめぐる議論も多様である。

仏教におけるケアとは何かと考えた場合、そもそも仏教はケアの道であると言える。なぜなら釈迦の出家のきっかけとなったのは「生老病死」であり、それに対する「苦」・「集」・「滅」・「道」は、それぞれ「病氣」・「病因」・「治癒」・「治療」に相当する。目の前の人の悲しみや苦しみに対して何が言えるかを、「ケア」や「ニーズ」、「グリーフ」といった言葉で置き換える前に、仏教者として自分が何を言えるかを、自分の言葉、自分の拠りどころとする仏教の言葉で考え、実践していくことが大切なのではないだろうかとの提言がなされた。

■仏教におけるケア—実践例

日本仏教における「ケア」の実践例として、行基や叡尊、忍性らの実践が紹介された。また特に親鸞における救いのかたちに触れ、親鸞における救いとは、人間のはからいを超えた阿弥陀仏のはからいとして確信されていることを、親鸞における自然（じねん）の捉え方で抑えつつ、衆生を必ず救うという弥陀の本願を人々へ説いたという点において、親鸞における二重の救いが指摘された。

■仏教におけるケア—現代の実践例

現代において、仏教と寺がそのようにケアに関わっているのかの例として、栃木県益子氏にある普門院西明寺の実践と田中雅博医院長の活動が紹介された。また、仏教は老病死の苦の現場に行くことこそが大切であるとする田中院長の指摘に加え、仏教者が生に寄り添うことが老病死に寄り添うことに繋がるとの提言がなされた。

死に関するケアとして、仏教は通夜・葬儀、七日参りやその他法要を行っており、それらは新しく特別なことではないかもしれないが大切なケア活動である。また、報恩講や聞法会といった真宗独自の場は、生きている人々の日常に関わる、日常を生きるためのケアであり、老病あるいは死のケアにも繋がるものであると指摘された。

【まとめ】

本講義では、仏教はケアに対してどのように関わってきたかを、仏教におけるケアのかたちをめぐる議論とその実践例を通して学び、仏教はケアに対してどのように関われるかを考えるきっかけとなった。特に仏教者として何が出来るかを自覚し、仏教の教えや実践を通して現代におけるケアへの関わり方を再考する必要性を感じた。

以上

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センターリサーチ・アシスタント 金澤豊